

聖路加看護学会

ニュースレター

第15回聖路加看護学会学術大会開催にあたって 第15回学術大会学術大会会長 佐藤エキ子 (聖路加国際病院)

第15回聖路加看護学会学術大会のご案内をいたします。

今回の学術大会では、臨床看護実践にフォーカスを当てたいと考え、メインテーマは「開こう『看護の技術箱』～臨床看護実践への貢献～」としました。医療の高度化、医療に対する患者のニーズの多様化、医療安全に対する認識の高まりなど、医療サービスに対する要求は強まるいっぽうです。このような状況において、臨床現場では、質の高い看護サービスを提供していかなければなりません。

今回の学術大会では、「看護の技術箱」をキーワードに挙げ、実践・教育・研究の領域で活躍されている先生方を講師としてお招きし、各講師の「技術箱」を開けていただきます。大会当日は看護技術の本質、新しい看護技術の概念と看護実践への応用、基礎研究と高度看護実践との橋渡しとしてのリサーチ、等について系統的に講義していただきます。また、国政で活躍されている国会議員の先生を講師としてお招きし、看護をもっと社会に評価してもらうための方策について学習したいと考えています。

一般演題の発表形式は第14回学術大会に習って、示説による発表を予定しています。また、今回の学術大会の初企画として、「看護技術展示」も予定しています。この企画のねらいは、看護実践に携わっている方、あるいは看護関連の研究をしている方たちが日々の実践の中で独自に工夫・開発した看護技術の「コツ」「道具」などを、学術大会の場を利用して、参加者の皆さまにお披露目していただく、というものです。

さわやかな初秋の土曜日、一緒に「看護技術」の知見を蓄積してみませんか？ 皆さまと会場でお会いできることを楽しみにしております。



第15回聖路加看護学会学術大会のご案内「第2報」

メインテーマ：「開こう『看護の技術箱』～臨床看護実践への貢献～」
 会期 2010年9月25日(土)
 会場 聖路加看護大学 東京都中央区明石町10-1
 大会長 佐藤エキ子

プログラム(予定)

大会長挨拶 佐藤エキ子
 対談
 「開こう看護の技術箱」 川島みどり氏・菱沼典子氏
 教育講演1.
 使おうみんなの看護の技術箱「新しい看護技術の概念と看護実践への応用」 徳永恵子氏
 教育講演2.
 磨こう看護の技術箱「基礎と臨床を結ぶトランスレーションリサーチ-基礎研究成果と高度看護実践との橋渡し-」 真田弘美氏
 特別講演1.
 示そう看護の技術「看護の技術を社会に伝えよう」 阿部俊子氏
 特別講演2.
 「旅」～ふれあい～“自分の技術”を活かして世界で活躍している日本人をたずねて 関口知宏氏
 一般演題 示説発表
 看護技術展示

一般演題募集要項

- 1) 申し込み資格
共同研究者も含めて本学会の会員、または入会手続き中の方
- 2) 申し込み方法
演題申し込みおよび抄録原稿提出を同時に行ってください。演題は未発表のものに限ります。
 [募集期間] 2010年4月26日(月)～5月31日(月)
 [申し込み方法] 詳細は学術大会HPをご参照ください。

- 3) 発表形式：示説のみになります。
なお、一般演題は査読を行います。

看護技術展示募集要項

看護の現場に携わっている方、もしくは看護関連の研究をされている方で、日々の実践の中で独自に工夫・開発した看護技術の「コツ」「道具」などを、参加者の皆さまにお披露目していただく機会です。

- 1) 申し込み資格
医療機関などで看護実践をしている方、もしくは看護・医療関連の研究をしている方
- 2) 申し込み方法
展示申し込み・看護技術概要書(実演・手順・プロトコル等の記載原稿)提出を同時に行ってください。
 [募集期間] 2010年4月26日(月)～5月31日(月)
 [申し込み方法] 詳細は学術大会HPをご参照ください。
- 3) 発表形式：展示コーナーでの、実演あるいはパネル等による看護技術の説明を予定しています。
なお、技術の内容は選考を行います。

参加費 事前申し込み：2010年9月3日(金)まで
 [学会員] ¥5,000(当日参加 ¥6,000)
 [非学会員] ¥6,000(当日参加 ¥7,000)
 [大学院生] ¥3,000(当日参加 ¥3,000)

問い合わせ先

学術大会事務局：〒104-8560 東京都中央区明石町9-1
 聖路加国際病院 看護管理室(高屋・池亀・井上)
 FAX：03-3544-0649 e-mail：slnr15@luke.or.jp

詳細は、同封の「第15回聖路加看護学会学術大会のご案内」をご覧ください。

平成21年 聖路加看護学会 学術交流委員会主催 パネルディスカッション

第13回聖路加看護学会学術交流会は、2009年10月24日（土）、聖路加看護大学403講義室にて、「臨床家がなぜ博士課程で学ぶのか？ 大学院教育のイノベーション」をテーマに開催されました。看護系大学の学部生や大学院生を中心に、臨床家や教員など様々な立場の参加者が集い、会場は終始熱気に包まれました。3人のパネリストの実践に裏付けられた探究心や現状の課題などの経験談に続き、参加者間でディスカッションを行いました。臨床と研究をつなぐ熱いパワーを共有する交流会となった当日の概要をご紹介します。



高井今日子講師



深谷基裕講師

これからの看護を決定していくもの その実践と分析

高井今日子（聖路加国際病院・

聖路加看護大学大学院博士後期課程）

「臨床が大好き！」と颯爽と語る高井さんは、大学院博士後期課程で学びながら、ナースマネジャーとして実践に携わっている。大学院で取組んできた研究テーマは、『看護職がもつパワー』。スタッフナースの頃から抱えていた実践の問いがそのまま研究の問いになった。

進学のかっけは、管理職をしながら自分の知識を深めたいと思ったこと。自分には、何か不足している、それがあれば何かできるのではないかと思いたち、上司の理解を得て2年間の休職をとり、博士前期課程に進学した。「何かを成し遂げるとは？」「実現できる場合とできない場合何がどうちがうのか？」「何がそれを発揮させるものか？」など自問自答していたところ、「看護のパワーは臨床にあるのか？政策にあるのではないか？」と指導教授から一蹴された。それが大きな転機となった。『看護政策』に焦点を絞り、厚生労働省の審議会に通い、看護は他分野の人々との相互作用で動いていることを強く感じるようになった。

今後の課題として、看護職の政策参画と看護政策の味方の拡大をあげ、政策に参加できる人材育成や、患者への責務を果たせるリーダーシップ養成などの継続教育の必要性を強調した。二足のわらじを履きながら学び続ける高井さんの研究は、看護政策のチームメンバーに積極的に患者を巻き込んでいくという新たな視点が加わり発展し続けている。

博士課程での学びを臨床へ

深谷基裕（日本赤十字看護大学大学院博士後期課程）

人工呼吸器のアラーム音を介してきこえる子どもの「息苦しさ」の叫びに突き動かされ、大学院に進学した深谷さんは、大学院博士後期課程で学びながら、研究フィールドであるクリニックで研究に取組んでいる。子どもの声を聴き、それを解釈する力、現象を理解する力について繰り返し語った。

深谷さんの看護師としての第一歩はNICUからはじまった。医師や看護師の指示が飛び交う現場でアラーム音が悲鳴のように聞こえた。この「息苦しさ」に何かしなければとの思いがいっぱいで、何もできない現実との間に大きなギャップを抱えてのスタートだった。仕事に慣れた3年目、「看護とは何か」わからなくなった。余命わずかな新生児とその家族との出会いが転機となった。子どもと川の字で寝たい、一緒に家に帰りたいと具体的な望みがあった。院内で過ごすファミリーケアを適用すればそれでよいのか？「慣性」と「感性」について考えさせられた。小児看護や子どものことについて記述して他者に伝えることができないもどかしさに進学を決意した。

深谷さんの研究テーマは『喘息のこどもの息苦しさ』。エスノグラフィの手法で丹念にインタビューを重ね、「ヒューヒューと魂が抜けてく音がした」「寿命が減ってく音がした」など子どもの声から現象の理解が深まった。家族や看護師の見方も変わっていくのを感じた。実践に変化を起こすためにアクションリサーチにもっていきたいと力強く抱負を述べた。



熱気あふれる会場



活発な意見交換

博士の資質をいかに臨床で発揮するか

中川有加 (大阪赤十字病院・

聖路加看護大学大学院博士後期課程修了)

「問題は現場で起こっている！」と熱く訴える中川さんは、博士後期課程修了後、大阪赤十字病院で事業運営や新人教育などに携わっている。「実践をよくしたい」「看護のレベルをあげたい」との思いが博士臨床家のパイオニアとしての地道な活動を支えている。

医師から「勘でものをいうな」と言われたことがきっかけで、「この勘を証明してみようではないか！」と奮い立ち、大学に編入、大学院に進学した。教科書には記されていない実践知、『お産の介助の仕方(会陰保護の仕方)』を研究テーマに勉学に専念した。大学院で学んでよかったことは、実践知の存在がわかったこととそれを証明するための研究方法わかったこと。自分の使命は、「実践知を明らかにし、看護のレベルを上げること」と思い、博士後期課程修了後は迷わず現場に戻った。しかし、現場では博士を受け入れること自体が初めてであるため、当初は学んできたことをどのように臨床に生かすか試行錯誤だった。大学院で修得した「住民のために」という活動理念をもとに、住民のニーズにあわせて産後アフターケアや母乳外来の整備などに取り組んできた。ケアの質を担保するためにはシステムティックな管理運営が必要と考え、手順書作成から着手、着実に実績をあげている。

臨床で自分の研究を検証したいと思いつけているが、実際には時間と資金が確保できない。忙しいけれど一緒に研究していく仲間が欲しい。そのためにも、今後は大学と手を組んで、臨床でも積極的に研究を受け入れていくことも重要であると今後の課題を提起した。



中川有加講師

ディスカッション

参加者からは、「チーム医療の可視化についてどう考えるか」、「実践・教育・研究をどうリンクさせればよいか」、「大学の基礎教育で実践的な技術を習得させるべきではないか」、「臨床に戻るべきか博士後期課程に進学すべきか悩んでいる」などの感想や意見、質問が寄せられた。最後に司会の鶴田委員長から「大学院では、現場での経験の積み方とまた別の経験の積み方があるのではないか」との新たな角度から問いが投げかけられた。

パネラーと参加者との意見交換からは、看護師が患者ひとり一人の医療にリーダーシップを発揮するためには、看護の現象を理解し、実際に行っている実践の言語化が課題である、大学の基礎教育では、「学び方を学ぶ」ことが重要であり、失敗を内省して建設的に分析できる力や人の痛みや他者を思い遣れる人間としての感性を育むことが大切である、実践における課題を意識し、研究の問いを抱き、学びたいと思った時が進学の好機である、立ち止まって客観的に振り返ることができる大学院での時間は、自身の経験の意味や価値を確認し自己成長できる貴重な時機でもある、臨床では大学院での学びをパワーに変えて成果を出すことが求められるため、看護のパワーを周囲に示すと同時に自分自身もパワーアップし続けていかなければならない、など臨床と研究をつなぐ重要事項を確認し、共有することができた。

これからの大学院教育では、臨床と研究との連携・連動をさらに意識することが求められています。このことは、実践科学である看護の発展には欠かせないことです。交流会を通じて、臨床家や患者や住民との対話や交流を積極的に行いながら、大学院生や修了生とともに臨床で抱いた研究の問いを丁寧に育み、研究成果を臨床と共有することが重要であることを確認することができました。この会場に集い、語り合った参加者のひとり一人の小さな意識変革がやがて大きな看護の発展につながっていくことを期待したいと思います。高井さん、深谷さん、中川さん、そして参加者の皆さんに感謝いたします。

(学術交流委員会 鶴田・中山・佐竹・大森)

本学術大会のメインテーマは「開こう『看護の技術箱』～臨床看護実践への貢献～」です。今年はナイチンゲール没後100年という年にあたり、ふたたびナイチンゲールの著書「看護の覚え書」が注目されています。ナイチンゲールは“看護がなすべきことというのは、自然が患者に働きかけるのに最も良い状態に患者を置くこと……”と記し、最上の方法で患者の消耗を最小限にとどめて行うことの大切さを述べています。これらについては「看護の覚え書」の各章の項目、例えば換気と保温、食事、ベッドと寝具類、身体の清潔、病人の観察等において詳しく記され、単なる看護行為ではなくさまざまな要素を含めた看護技術 (nursing art) が求められていることを示唆しています。一方、聖路加国際病院理事長の日野原氏はウィリアム・オスラー博士の「ナースのための7つのコツ」として、愛のこころ・気のきくこと・快活・優しさ・同情・清楚・寡黙を紹介しています。この二つの著書をとおして「看護 (技術) は、科学的であり創造的でありかつヒューマンであり、それだけに“奥の深い技術”と言えるのではないのでしょうか。

今大会ではこの奥の深い「看護の技術箱」を開けてみたいと思います。以下に講師がお薦めする文献を紹介し、各講師の技術箱をより身近に理解していただくとともに、臨床看護実践の場で活用していただけることを期待しつつ。

(佐藤エキ子)

1. 対談：開こう看護の技術箱について

川島みどり (2008)：新訂 キラリ看護，医学書院。

菱沼 典子 (2009)：研究による経験知の実証 - 筋が通った看護技術を確立するために - ，日本看護技術学会誌，8 (3)，4 - 9

2. 教育講演 1：新しい看護技術の概念と看護実践への応用について

徳永 恵子 (2008)：人としての機能を阻害する褥瘡予防環境整備への警鐘：看護学雑誌72巻，7号，572～577

徳永 恵子 (2008)：キネステティック概念に学ぶケアリング，日本キネステティック研究会誌，1巻，1号，1～4

3. 教育講演 2：基礎と臨床を結ぶトランスレーショナルリサーチ

- 基礎研究成果と高度看護実践との橋渡し - について

真田 弘美，大桑麻由美編著 (2009)：ナースのためのプロフェッショナル“脚”ケア，中央法規

4. 特別講演 2：「旅」～ふれあい～“自分の技術”を活かして世界で活躍している日本人をたずねて

関口 知宏，関口知宏のファーストジャパニーズ，徳間書店

お知らせ

学術交流委員会

聖路加看護学会看護実践科学助成基金2010年度「研究助成」の募集を行いました。応募いただいた方々には、近日中に選考結果を通知いたします。この基金制度は、「看護実践科学研究の推進を目指し、看護実践の向上と看護学の発展に寄与すること」を目的としています。1年後、聖路加看護学会らしい実践と研究をつなぐ成果が得られることを願っております。

次回の学術交流会は、2010年10月に開催する予定です。詳細につきましては、決り次第学会ホームページ等でお知らせいたします。皆様と共に有意義な時間を共有できることを楽しみにしております。

(担当理事：鶴田恵子・中山洋子)

学会誌編集委員会

2009年9月の総会にて学会誌編集事務局を外部の業者に委託することが承認され、10月より編集事務局は(株)ライフサポート社内となりました。また、投稿規定も改定され、投稿の際には専用のチェックリストを使用して、原稿に不備がないかどうかを確認できるようになりました(詳しくは学会ホームページをご覧ください)。2010年3月に発行予定の第14巻1号は、ライフサポート社に業務を委託して初めてできあがる学会誌となります。業務の引継ぎのため発刊が予定より遅れ、皆様にはご迷惑をおかけしております。なお今後は専任の事務担当者が業務を行ないますので、タイムリーでスムーズな投稿・査読作業が行なわれるようになると思っています。ますますの投稿ならびに、編集へのご協力をお願いいたします。

(担当理事：太田)

庶務

・年頭の理事会において、庶務として2010年度活動計画の確認をいたしました。各担当理事のリードのもと、各委員会では鋭意、事業への取り組みが行われ

ています。看護実践科学研究助成基金の運用開始、名誉会員制度の施行など新たな活動が期待されます。

- ・現在の会員数は566名です。昨年の同時期と比べ10名程度減少しています。会員の皆様、周囲の方々にも本学会への勧誘を引き続きお願いいたします。
- ・皆様の勤務先や所属、住所などの変更がありましたら、本部事務局まで速やかにご連絡くださいますようよろしくお願い申し上げます。事務局への連絡は、郵便、Fax、E-mailのいずれかをお願い致します。

E-mail address: slnr@slcn.ac.jp Fax: 03-5565-1626

(担当理事：佐居由美・森明子)

会計

日頃より、当学会運営へのご理解、ご協力ありがとうございます。学会の年度会費の納入状況をお知らせすべく、お一人お一人への会費振込用紙を作成いたしました。何分にも、手仕事のため、お名前に変換ミスがあるかもしれません。どうぞご容赦ください。お手数ですが、ご修正のうえ、会費をお納めいただけるとうれしいです。

当該年度の会費の納入が確認できない場合、学会誌の発送を見合わせております。2009年度(2008年10月～2009年9月)発刊の学会誌がお手元ない方は、振込用紙をご確認ください。また、2010年度の年会費は2010年6月30日までに納めください。

会費に関するお問い合わせ：メールもしくはファックスで、大久保宛にご送信ください。

Fax: 03-5803-0154 または Email: kouko.rhn@tmd.ac.jp

タイトルに「聖路加看護学会会費問い合わせ」と明記願います。

振込先：郵便振替口座 00100-8-670371 加入者名：聖路加看護学会

(担当理事：大久保功子)

編集後記

今年も桜咲く出会いの時季となりました。今年度もニュースレターが皆さまにとって、良き出会いのための情報源となるよう心がけてまいりたいと思います。(小松)